



目次 (CONTENTS)

拠点大学ワークショップ開催…………… 2 <i>Report on Core University Program Workshop in Kyoto</i>	インドネシア大統領選挙監視団…………… 6 <i>The Japanese Election Observers' Mission in Indonesia</i>
国立大学附置研究所・センター シンポ「アジアを地域研究する」開催 <i>Symposium held by "Shocho-Kaigi" (Association of National Universities' Institutions and Research Centers)</i>	GIS-IDEAS 2004 国際会議ハノイで開催 <i>International Conference "GIS-IDEAS 2004" in Hanoi</i>
地域研究コンソーシアム設立報告…………… 3 <i>Inauguration of Japan Consortium for Area Studies</i>	<東風南信> Reflections…………… 7 西ジャワの葉バナナ栽培と土壌劣化 <i>A Dilemma between Large Cash Income and Soil Depletion in a Mountainous Village of West Java</i>
21世紀COE京都ワークショップ「フィールド ワークから紡ぎだす—発見と分析のプロ セス」開催 <i>Report on Kyoto Workshop held by 21st Century COE Program</i>	人事 Personnel Changes…………… 8-9 <海外疾病だより> <i>Getting Sick Here and There</i> …… 9 <i>Colloquia</i> …………… 10
<栄誉> Award Winners…………… 4 秋の叙勲で市村眞一元東南アジア研究 センター所長に瑞宝中綬章 玉田芳史著『民主化の虚像と実像』が 平成16年度大平正芳記念賞を受賞 柳澤雅之助手に日本熱帯農業学会奨励賞 東南アジアセミナー「フィールドとの関わり、 フィールドへの貢献」開催…………… 5 <i>Southeast Asia Seminar "Relation to the Field and Contribution to the Field"</i>	研究会報告 <i>Report on Seminars</i> …………… 11 <連絡事務所だより> <i>Letters from Liaison Offices</i> …… 12 出版ニュース <i>Publication News</i> …………… 13 <i>Kyoto Review of Southeast Asia</i> <Visitors' Views>…………… 14-16
インドネシア選挙グッズを展示 <i>Display of Election Campaign Goods from Indonesia</i>	



インドネシア大統領選挙で投票する人々
(関連記事 6ページ)

拠点大学ワークショップ開催

10月6～8日、京都大学芝蘭会館にて、日本学術振興会の助成により日タイ拠点交流プログラム共同研究4「東アジアにおける中産階級の研究」、5「東アジアにおける社会的流動に関する研究」の研究取りまとめを目的として合同セミナーを開催した。セミナーにおいては、「中産階級と政治」(Middle Classes in Politics)、「中産階級の政治経済学的分析」(Middle Classes in Political Economy)、「文化とアイデンティティ」(Culture and Identities)、「旅程としての伝記」(Biographies as Itineraries)、「越境する人とモノ」(Cross Border Flows and Movements)、「流動の生物学・生態学」(Biology and Ecology of Flows)の6セッションにおいて、合計31論文が提出され、活発な議論が行われた。本セミナーの成果は本年度中

にまず会議録のかたちで出版され、来年度以降、テーマ的にまとまりのある論文を編んで、論文集のかたちで出版する予定である。(文責：白石 隆)



国立大学附置研究所・センターシンポ 「アジアを地域研究する」開催

11月11日、国立大学附置研究所・センター長会議主催(地域研究コンソーシアム後援)のシンポジウム「アジアを地域研究する」が学士会館で開催され、研究者のみならず一般市民など約100名が参加

した。国立大学の法人化を機に大学附置の研究所や研究センターの活動を広く知らせるための新たな試みで、今回は、同会議第三部会(人文社会系12機関で構成)によって企画された。

田中明彦東大東洋文化研究所所長の「東アジア共同体構想の政治過程」、寺西重郎一橋大経済研究所教授の「アジアの金融・企業統治システム」という東アジアの政治と経済に重点を置いた報告に続いて、内堀基光東京外大アジア・アフリカ言語文化研究所教授の「民族集団の生成・境界・消滅」、田中耕司当研究所所長の「グローバル時代の生物資源管理：『地域』の視点から」という東南アジアの民族と資源に重点を置いた報告が行われた。各報告は問題とする対象・地域、研究手法において大いに異なっていたが、所長報告では、臨地調査に重点を置く当研究所の研究姿勢が改めて強調された。

なお、同会場では第三部会所属12機関の研究内容等を紹介するパネル展示も行われた。ほぼ1カ月をかけて作成した当研究所のパネルは内容が充実していると好評を得、今後、当研究所東棟2階で常時展示することになっている。(文責：米沢真理子)



地域研究コンソーシアム設立報告

さる2004年4月26日、KKRホテル東京において設立集會が開催され、地域研究コンソーシアムが発足した。現在までに、地域研究に関心をもつ大学附置研究所や研究センター、大学共同利用機関、大学院研究科や学部、21世紀COE拠点形成プロジェクト、NGOや学会など全国の57の組織が参加している。発足からほぼ半年が経過し、コンソーシアムの活動もようやく軌道に乗り始めた。まず「地域研究による『人間の安全保障学』の構築」と「グローバル化時代の新地域形成」という2つのアンブレラ・プロジェクトを推進するために公募研究を立ち上げた。また組織や既存のプロジェクトを越えた研究連携を促進するために「交流支援プログラム」を募集した。地域研究の成果を社会に還元するために移動公開講演会の計画を進めている。さらに地域研究の面白さや大切さをこれからの社会を担う世代に伝えるためにニューズレターを発行し、広く図書館や教

育組織に配布すべく準備を進めている。今後は教育や情報資源の相互利用についても具体的なプログラム作りを進めていく予定である。参加組織にとって、そして地域研究に関心をもつ人々にとって地域研究コンソーシアムをより実りのある組織としていくために、みなさんからアドバイスをいただければ幸いである。
(文責：河野泰之)



21世紀COE京都ワークショップ 「フィールドワークから紡ぎだす—発見と分析のプロセス」開催

10月30日と31日、京都大学百周年時計台記念館にて、21世紀COEプログラムの一環として京都ワークショップ「フィールドワークから紡ぎだす—発見と分析のプロセス」が開催された。大学院生を中心とする若手研究者17名の発表と、佐藤郁哉教授（一橋大学）と松田素二教授（京都大学）による2つの講演が行われ、登録者数は200名近くに達した。

このワークショップには2つの大きな特徴があった。ひとつは、主要なテーマがフィールドワークのプロセスにあったという点である。フィールドで事実を発見してから成果を公表するまでの過程を発表の中に織り込んで示し、新しいフィールドワーク研究の可能性を探ろうという意欲的なテーマ設定であった。このことが、多数の聴衆を集めた大きな理由であろう。もうひとつの特徴は、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の大学院生を中心とする企画グループがワークショップを運営したことにある。アンケート結果でもこの点がきわめて高く評価されている。大学院生自らが企画運営に携わり、自身の成果をより多くの人に示すことができた（出版社からの接触を受けた発表者もいた）という点において本ワークショップは画期的であり、このような企画を研究教育機関としてどのように継続してサポートできるかが今後の大きな課題であろう。
(文責：柳澤雅之)



秋の叙勲で市村眞一元東南アジア研究 センター所長に瑞宝中綬章



1969（昭和44）年4月から10年間の長きにわたり東南アジア研究センター所長を務められた市村眞一教授（京都大学名誉教授、現在、（財）国際東アジア研究センター顧問兼北九州市顧問）が平成16年度秋の叙勲に

おいて瑞宝中綬章を受章された。このたびの栄誉は、市村教授の東南アジア研究センターをはじめとする長年にわたる学界および教育界における指導的なご活躍がもたらしたもので本研究所にとっても誠に喜ばしいことである。

市村教授は、1968年大阪大学から東南アジア研究センターに転任されてから、1988年3月に停年退官で同センターを去られるまで、国民所得分析、産業連関分析、マクロ計量経済モデルによる日本経済の数量分析の分野で先駆的業績をあげられ、計量分析をわが国に定着せしめる上で貴重な貢献をされた。また、東南アジア研究センターを学際的な総合地域研究の拠点とするために、バンコクおよびジャカルタに連絡事務所を開設するなど研究組織の充実と地域研究の発展に貢献された。

この市村教授の栄誉を称えて、来る平成16年12月12日にウェスティン都ホテル京都で「市村眞一先生の叙勲を祝う会」が開催されることになっている。

玉田芳史著『民主化の虚像と実像』が 平成16年度大平正芳記念賞を受賞



玉田芳史京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助教授の『民主化の虚像と実像——タイ現代政治変動のメカニズム』（「地域研究叢書」14）が平成16年度の大平正芳記念賞を受賞した。大平正芳記念賞は「環太平洋連

帯構想」の発展に貢献する政治・経済・文化・科学技術ならびに環太平洋地域の地域研究に関する優れた著作を表彰するために1985年に設けられたもので、今年が20回目となる。これまでに、東南アジア研究所関係者では、土屋健治、石井米雄、白石隆の各氏が受賞している。

贈呈式は6月11日、東京虎ノ門のホテルオークラで行われた。

柳澤雅之助手に 日本熱帯農業学会奨励賞



2004年3月27日に開催された日本熱帯農業学会総会において、同学会奨励賞が柳澤雅之助手に授与された。同奨励賞は熱帯農業の分野において優れた研究業績をあげ、将来の発展が期待される者を対象として設けられたもので、今回

の受賞は、柳澤助手が長年にわたって現地で調査を行い、着実にその研究成果をあげてきた「紅河デルタ村落における農業生産システムの変容に関する研究」が高く評価されたことによる。

東南アジアセミナー

「フィールドとの関わり、フィールドへの貢献」開催

第28回目の今年の夏期セミナーは「フィールドとの関わり、フィールドへの貢献——地域研究の多様なアプローチ」をタイトルに掲げて9月6～10日にかけて行われた。タイトルからも窺えるように今回のセミナーは、各講師がフィールドにどのようにアプローチしてきたのかを受講生に率直に語ってもらう場とした。そして、受講生が自分で考え、積極的に発言するような仕掛けを作った。初日に懇親会を開き、3日目と4日目の自由討論の時間に受講生を3グループに分けてテーマ別の議論と発表に充てたのである。また最終日には、2グループに分けて「北タイにおける自然資源管理」をテーマにロール・プレイング方式で議論・発表を行った。

受講生23人は、講師が興味深く語るフィールドへのアプローチに熱心に耳を傾けるだけでなく、質疑応答や自由討論で積極的に発言し、セミナーは大いに盛り上がった。最終日の夏期セミナー初のロール・プレイングは個人的にも面白かった。第1グループは全ステークホルダー参加型の協議会による



資源管理方法を訴える一方、第2グループは森林局の介入による資源管理しかないとの結論に達し、2つのグループの結論は大きく異なったのである。相互信頼・不信、情報・経験の多寡が生み出す結果の違いにはこちらも学ぶことが多かった。

(文責：岡本正明)

インドネシア選挙グッズを展示

夏期セミナー開催にあわせ、図書館の閲覧室でインドネシアの選挙グッズの展示を行った。インドネシアでは本年4月に議会選挙、7月に大統領選挙第1回投票、9月に大統領選挙決選投票と3度の国政選挙が行われた。特に大統領の直接選挙は建国以来初めてのことであった。展示では議会選挙と大統領選挙において各陣営のポスターや旗、また有権者に配布されたグッズを展示した。配布物にはインドネシアの選挙名物と化している政党のマークがあしらわれたTシャツをはじめ、ステッカーやタバコ、飴、ビデオ、CDに至るまで様々であり、その種類は増える一方である。グッズとともに、各政党、大統領選候補者の簡単なプロフィールと選挙結果も加え



新任大統領コドヨ陣営の選挙グッズ

た。視覚的にインドネシアの政治に触れるよい機会となったのではないだろうか。

(文責：学振特別研究員 見市 建)

インドネシア 大統領選挙

監視団

本監視団の目的は2004年7月5日実施の大統領選挙に際し選挙監視活動を行うことにあった。その特徴は、

インドネシア各地において、大統領選挙のプロセスを、2004年4月5日実施の中央、地方の議会議員選挙のプロセスと比較しつつ、長期にわたる選挙プロセスの観察という手法によって監視活動としたことにある。周知のとおり、外国政府、国際機関の選挙監視活動と言えば、選挙当日に投票状況を観察し、選挙が自由に公平に実施されたかどうかを評価するのが通例である。しかし、投票は選挙プロセスの一部にすぎず、選挙監視本来の目的からすれば、選挙プロセスを一定期間、観察し、選挙の評価と提言を行うことが望ましい。本監視団の活動はこれを目的とし、インドネシア民主化のさらなる発展のため、



選挙制度、実施体制にどのような改善が図られるべきであるかの観点から、大統領選挙の評価と提言を行った。

なお本監視団は白石隆（研究所教授）を団長、岡本正明（研究所助教授）、河野毅（政策研究大学院大学助教授）、本名純（立命館大学助教授）、見市建（研究所研究員）を団員とした。

（文責：白石 隆）

GIS-IDEAS 2004 国際会議 ハノイで開催

東南アジア研究所が後援した日本・ベトナム空間情報学コンソーシアム（JVGC: Japan Vietnam Geoinformatics Consortium）主催のGIS-IDEAS 2004 国際会議（International Symposium on Geoinformatics

for Spatial-Infrastructure Development in Earth and Allied Sciences）が、さる9月16～18日の3日間、ベトナムのハノイ理科大学で開催された。本国際会議は、空間情報学の自然・社会・人文各領域への応用に関する内容をテーマにしており、今年度は第2回の開催である。オープニングでは、日本大使館から服部則夫大使など来賓の挨拶の後、8カ国から151名（日本からは31名、本研究所からは5名）が参加して、自然環境保護・自然災害管理・水資源管理・土地利用・地理情報システム開発・リモートセンシングとモニタリングなどのセッションで、90を超える報告と討論が行われた。特に今回は、2010年にハノイ市が建都1000周年を迎えることから、タンロン遺跡の保存・継承やデジタルミュージアムに関する特別セッションHistorical GISが設けられ、熱心な討論が行われた。なお、本会議の様子は、当日の夕刻にベトナム国営テレビ放送で報道された。

（文責：柴山 守）



西ジャワ山村の葉バナナ栽培と 土壌劣化

辻井 博



ここ5年ほどチア
ンジュール県の山村
で葉バナナの栽培の
急展開を観察してき
た。今まで稲作農村
とコメ政策・貿易を研
究してきた者には新
鮮な経験であった。

葉バナナはジャワ
の農家にとって重要な換金作物の1つである。調査
村では2001年において葉バナナ所得が農家の農林
所得の約70%を占めている。バナナの葉は食物の
包装、食物加工時の包装、お皿といった様々な形で
利用される。1990年以降この村では、地力収奪的
な農法による葉バナナの栽培面積が急速に広がっ
てきた。栽培面積は、特に1997年の経済危機以降
年率約10%の速さで拡大した。この急速な拡大は、
集落民に短期的な所得の増加・安定化と長期的な土
壌劣化というジレンマをもたらした。このようなジ
レンマはジャワの山地では野菜栽培やタバコ栽培な
どでも存在する。

圃場データと所帯データの計量分析と記述分析
を行った。圃場データから、地力収奪的葉バナナ栽
培を導入する確率が高いのは、傾斜の急な圃場で、
その中でも樹木密度の低い傾斜地であることが明ら
かになった。逆に地力収奪的葉バナナ栽培導入の確
率が低いのは、葉バナナと樹木を組み合わせた持続
可能な葉バナナ栽培の経験の長い農家と、樹木密度
(特にネムノキ密度)の高い圃場であった。

世帯データから、まずより豊かで所有傾斜地の
樹木密度の高い農家は、地力収奪的葉バナナ栽培導
入の確率が低い。また家族労働力と扶養家族の多い
農家は地力収奪的葉バナナを導入しやすい。葉バナ
ナ販売組合などの地元の組織への参加も、地力収奪
的葉バナナの導入を増やす。さらに、土地に対する



権利の弱い農家、国有林伐採跡地を耕作している農
家も、地力収奪的葉バナナ栽培を導入する確率が高
い。樹木密度の低い傾斜地が貸し出された場合、そ
の土地ではやはり地力収奪的葉バナナ栽培が導入さ
れやすい。所有する圃場の数が少なく、葉バナナ以
外の現金収入源のない農家は、経済危機による生活
苦に部分的に対処するため、地力収奪的葉バナナ栽
培を導入しやすいことも分かった。

圃場データと所帯データを同時に使用した分析
から、農家が葉バナナの栽培による土壌肥沃度低下
に、葉バナナ植栽密度を減らすことで対処しよう
としていることが分かった。除草が土壌肥沃度の向
上につながり、また農家は葉バナナの短期的所得向
上効果に反応して葉バナナ面積と所得を増やしてき
た。これらは、この村の農家は葉バナナの地力収奪
作用をはっきり認識しているが、彼らの貧困が葉バ
ナナの栽培の急拡大を不可避にしてきたことを示し
ている。地力収奪的葉バナナ栽培の導入を加速させ
たその他の重要な要因は村と市場を結ぶ道路の建
設、葉バナナ販売組合の設立、1997年の経済危機
以降の山地村民貧困化と国有林管理の弛緩などであ
る。

土壌劣化を防ぐには、この村でかつて広く行わ
れてきた葉バナナと樹木を組み合わせた作付け体系
かもしれないことも分かった。

(1969～1977 東南アジア研究センター助手。現在
京都大学大学院農学研究科教授)

人 事

教官人事

<新任>



宋 現鋒 (ソン シャンフェン) 助手(2004年5月1日付)。1969年11月1日生。92年7月中国鉱業大学煤田地質学部卒業。95年6月同大学院修士課程修了。同年9月中国科学院地理研究所博士後期課程

入学、98年7月同課程修了、自然地理学博士号取得。同年9月中国科技促進経済投資公司項目部研究員。2000年4月日本学術振興会外国人特別研究員として、京都大学東南アジア研究センターで研究に従事。2002年4月京都大学東南アジア研究センター助手。2003年4月京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・東南アジア研究センター(東南アジア研究所) 21世紀COE研究員。

[主要論文]

Integrating Geographic Collection Database Repositories with A Z39.50-Compliant Gateway. *Asian Journal of Geoinformatics* 4(2), 2003. (共著) ▽ An Open Source GIS Solution for Discovering Cambodia through Maps and Facts. In *Proceedings of the FOSS/GRASS Users Conference, Bangkok, Thailand, September 12-14, 2004*. (共著)

外国人研究者人事

■外国人研究員

Pornpimol Manochai (タイ)。マハーサラカム大学シリドーン東北タイ学術情報センター・センター長。招へい期間 2004年5月19日～11月18日。研究題目「東南アジア研究所所蔵の東北タイ文献目録編纂」

Rini Yuliasuti (インドネシア)。インドネシア科学技術省デジタル情報部門長。2004年6月1日～11月30日。「東南アジア研究所における東南アジア研究資料の利用分析」

Nguyen Van Viet (ベトナム)。農業農村開発省ベトナム農業科学院科学計画・国際協力部長・助教授。2004年6月18日～12月17日。「ベトナム北部山地の土地利用・作付体系の変容と開発・環境政策」

Pongsak Sahunalu (タイ)。カセサート大学林学部造林学科教授。2004年6月18日～2005年6月17日。「熱帯林の修復と種の多様性保全」



Nordin Hussin (マレーシア)。マレーシア国民大学歴史学科助教授。2004年8月19日～2005年2月18日。「18～19世紀マラッカ海峡における社会生活と貿易」



HJORLEIFUR RAFN JONSSON (アイスランド)。アリゾナ州立大学助教授。2004年8月19日～2005年2月18日。「地域的視点からみたミエン少数民族の文化、歴史、および東南アジアにおける近代」



Pasuk Phongpaichit (タイ)。チュラロンコン大学経済学部教授。2004年9月21日～2005年3月20日。「危機以降のタイにおける資本の構造とダイナミズム」

海外疾病だより *Getting Sick Here and There*

北村 由美

第1号海外疾病だよりである。栄誉ある初回を季節外れのデング熱に罹った私が書かせていただくが、連載コラムとして毎回執筆としないことを願う。

6月中旬から8月末までジャカルタ連絡事務所に駐在していた。ジャカルタ滞在中の公務の中で、大変緊張しながらも待ちわびていた総長ご夫妻インドネシア訪問の週に、入院することになった。7月11日夜、頭痛がしたためセデスを飲んで就寝したが、翌朝は頭痛だけでなく全身の関節痛と寒気がし、熱が39度あった。総長インドネシア来訪前に回復せねばと思い、即刻SOSクリニックに向ったが、3日後に再検査に来るように言われ、原因不明の高熱を引きずったまま出迎えに行くことになる。その間は、解熱剤のパナドールを飲んででも一時的に37.5度ぐらいまで熱が下がるのみで、関節痛、下痢、吐き気などに悩まされた。16日になっても回復しなかったため、日本人医師がいるメディカロカに行ったところ、デング熱だと判明した。同クリニックは入院

設備がないのでホテルのような高級病院のポンドック・インダー病院に入院し、その際は、700万ルピア（約8万5千円）のデポジットが要求された（退院時には保険が適応されて返却）。デング熱の症状の一つに血小板の値の低下というのがあるが、通常25万ぐらいある血小板が、入院時に12万台、19日に8万台に落ちた。18日深夜から突然手のひらと足の裏を中心に全身に赤い発疹が出て、薬を貰っても全く痒みが治まらなかった。この発疹は回復の目印らしく、20日は血小板の値が上昇し始め、21日に退院した。ちなみに退院時の体温は、自己最低記録の34.5度だった。入院中興味深かったのは、朝4時ごろの検温に始まり、医師以外の実に多くの職員が、絶え間なくそれぞれの特徴のある制服姿で現れることと、私の症状の詳細が訪問客のリクエストに応じて自由に提示されているらしいということだ。大変だったのは症状の変化などでナースコールをする際に、気持ちは慌てているのに度々辞書を引かねばならなかったことと、病人食とは程遠い香辛料の効いた食事に手をつけることだった。

最後になるが入退院のすべてを助けて下さった加藤剛・まりこ夫妻をはじめ、現地にて、または京都から支えて下さった同僚と院生の皆さんに心から感謝したい。
(研究所助手)

■招へい外国人学者

近藤まり（日本）。アジア経営大学院（フィリピン）助教授。2004年5月26日～2005年3月31日。「フィリピンにおけるイスラム金融」

Goh Pek Chen（マレーシア）。マルチメディア大学講師。2004年6月1日～2005年5月31日。「知的資本と日本の経済発展に関する研究」

Suri Hartoyo（インドネシア）。ボゴール農業大学経済経営学部開発研究科長；**Dwi Rachmina**（同）。ボゴール農業大学農学部社会経済学科講師；**Siti Sugiah Mughahneisyah**（同）。ボゴール農業大学農学部社会経済学科講師。2004年10月8日～11月6日。「環境調和型農村開発に関する社会経済学的研究」

■外国人共同研究者

Claudio Oskar Delang（ドイツ）。パピオ大学人文社

会学科講師。2004年8月30日～2005年8月29日。「北部タイ山地における開発と社会資本の変容を特に焼畑耕作を行うカレンとモンの比較から論じる」
Sri Nuryanti（インドネシア）。LIPI 政治研究センター研究員。2004年10月24日～11月23日。「新宗教の動向——創価学会について」

事務官人事

- 岡崎道子会計掛主任は、9月30日付けで勸奨退職。後任に山崎景理学研究科等用度掛員。
- 南雲円総務掛主任は、10月1日付けで研究・国際部国際交流課専門職員に昇任。後任に谷川嘉奈子福井工業高等専門学校学生課学生係員。
- 神徳智恵総務掛員は、10月1日付けで総務掛主任に昇任。

COLLOQUIA

◎ 2004年4月22日「東南アジア研究所の学術ネットワーク——コンソーシアム・情報・現地語資料」河野泰之ほか

東南アジア研究所が幹事組織の一つとなって設立される地域研究コンソーシアムの目的、活動計画、運営体制などについて、現時点での案を提示し所員からコメントや意見を求めた。また双方向の情報発信をめざしたポータルサイトの導入計画や情報発信に重点を置いた現地語資料の活用などの計画を提示し議論した。地域間比較研究の推進や、より広い学術コミュニティを対象としたネットワークの構築、現地社会への知的貢献などを通じて、当研究所の活動を学術的にも社会的にもより強くアピールしていく必要がある。

◎ “Re-periodizing Philippine History” by *Patricio N. Abinales*, May 27, 2004.

The lecture explored the recurring dilemma of state-society relations in the Philippines, where the state is characterized by persistent weakness and ineffectual governance due to its capture by sectoral interests, especially political clans who use government office as a source of booty. While society regularly calls for better governance, efforts to strengthen state institutions often run afoul of Filipinos’ enduring resistance to centralization borne of experience with state rapaciousness and tyranny. The lecture engages this dilemma through a historical treatment of state formation, focusing on how the state has shaped society and been shaped in turn by its interaction with social forces.

◎ “A Look Ahead at the Coming Presidential Election in Indonesia” by *Shiraishi Takashi*, June 24, 2004.

With the Indonesian presidential election scheduled for July 5, this colloquium discussed the chances of the different candidates—Susilo Bambang Yudhoyono, Megawati, Wiranto, Amien Rais, and Hamzah Haz—to proceed to the second round on September 20. Based on public opinion survey data collected by Lembaga Survey Indonesia, it was predicted that Susilo Bambang Yudhoyono (SBY) and Megawati would compete in the second round, although it was too early to say anything definite about the final outcome of the election.

◎ “Institutions and Law Enforcement in Indonesia: Industrial Conflict Resolution by *Musyawah* or Rule of Law?” by *Mizuno Kosuke*, July 9, 2004.

This study analyzed a case of industrial conflict that resulted

in the formation of a stable industrial relations system at a garment company in West Java. It focused on the rules of industrial relations and the strategies of the parties involved in order to see the relationship between law enforcement and institution building. This case showed that even without effective law enforcement, or with weak law enforcement, institutions that support economic development—stable industrial relations in this case—can still be built. Continuing negotiations and communication are important to the achievement of Nash equilibrium/institution building. Creative strategies of negotiation include violating the law; even violence may evoke a collaborative response from an opposite party and result in stabilizing industrial relations.

◎ “Indonesian Chinese Popular Fiction from 1903 to 1942” by *Caroline S. Hau*, September 24, 2004.

This study analyzes Indonesian-Chinese (*peranakan*) popular fiction from 1903 to 1942. Peranakan reflections on, and anxieties about, identity and society are captured by recurring themes of desire and romance, class and ethnic relations and tensions, the ambiguous status of women, the allure and danger of money, and political and social struggles specific to the Indonesian-Chinese experience. They point to an emergent Indonesian-Chinese cultural consciousness made possible by the transformation of the Indonesian-Chinese socio-economic order in light of changes in Dutch colonial policies and practices, the growth of Indies (and overseas Chinese) nationalism, and the formation of an incipient print culture.

◎ “Redefining Librarianship” by *Kitamura Yumi*, October 28, 2004.

Library users often ask why Japanese libraries and librarians are not as good as their American counterparts. Although there are several differences between the two, most people do not discuss the different definition of “librarianship” in the two countries. In Japan, “librarianship” is used to refer to the practice of librarians or the functions of libraries. “Librarianship” would make better sense, however, if defined as the philosophy or ideology developed and applied in modern American society. This presentation reviews how “librarianship” was established in the United States and how it was adopted and disseminated in Asia.

◆ “JSPS Core University Seminar”

11月8日 Srawooth Paitoonpong (Thailand Development Research Institute) “Thailand’s Cross Border Economy: A Case Study of Sa Kaeo and Chaing Rai”

◆ Special Seminar of “State, Market and Community Study Group”

3月26日 Zamroni Salim (Research Centre for Economics, Indonesian Institute of Sciences) “The Analysis of Intra-Industry Trade between Indonesia and Japan: A Case Study in Manufactured and Agricultural Products”

7月6日 Riwanto Tirtosudarmo (Visiting Professor, Research Institute for Language and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies) “Living in Disguise? Minahasan Community in Oarai, Ibaraki”

11月4日 Siti Sugiah Machfud Mugniesyah (Center for Women’s Study Bogor Agricultural University) “Women’s Access to Land in Sundanese Community (The Case of Upland Peasant Households in Kemang Village West Java, Indonesia)”

◆ Special Seminar

4月20日 Pipat Patanaponpaiboon (Visiting Research Fellow, CSEAS) “A Case for Mangrove Forest Rehabilitation”: Aung Than (ditto) “Sustainable Tropical Forest Management: Myanmar Perspectives” ▽ 5月24日 Jeffrey Hadler (University of California, Berkeley) “Translations of Antisemitism: Jews, the Chinese, and Violence in Colonial and Postcolonial Indonesia” ▽ 5月28日 Porphant Ouyyanont (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Aspects of Bangkok’s Growth in the 19th and 20th Centuries” ▽ 6月11日 Nicola Tannenbaum (ditto) “Thongmakhsan, Northwestern Thailand, Through Time: Life and Livelihood 1977–2003” ▽ 6月25日 Ukrist Pathmanand (ditto) “Big Four Telecoms, Thaksin Regime and Democracy in Thailand” ▽ 7月2日 Khin Lay Swe (ditto) “Cropping-Pattern Approach to the Dry Land Agriculture in Kyaukpadaung Township, Dry Zone, Central Myanmar” ▽ 9月27日 Nguyen Van Viet (ditto) “Efficient Management of Natural Resources for Sustaining Agriculture in the Sloping Land of Northern Vietnam by Participatory Watershed Research and Application” ▽ 10月15日 Hjorleifur R. Jonsson (ditto) “Forests, Bad Roads, and Democracy: Interpreting an Unsuccessful Protest” ▽ 10月19日 Nordin Hussin (ditto) “Malay Traders in the Straits of Melaka 1780s to 1790s”

◆ 「東南アジアの自然と農業」研究会

第115回例会：4月16日 辻 貴志 (神戸学院大学) 「共生の戦略——フィリピン・パラワン島南部における先住少数民族モルボグ族の沿岸域での自然利用とその意義」

第116回例会：6月8日 鼎 信次郎 (総合地球環境学研究所) 「東南アジアにおける土地利用変化が降水・気候変動に与える影響——これまでの研究および将来のブレイクスルーへ向けて」

第117回例会：10月29日 鮫島弘光 (京都大学生態学研究センター) 「ボルネオにおけるオオミツバチの渡り」

◆ 「東南アジアの社会と文化」研究会

第18回例会：5月21日 原田真理子 (広島大学) 「天国への道——タイ東南部カトリック教徒の信仰・実践」

第19回例会：9月17日 川上 崇 (京都大学) 「ベトナムの伝統的祭礼の復活に関する一考察——バックニン省トゥアンタイン県の一村落の事例から」

◆ 「農村開発における地域性」

第12回：地方行政・普及

6月7日 安田千恵子 (元 JICA 長期派遣専門家) 藤原洋二郎 (同) 「JICA住民参加型農村開発行政支援プロジェクト (PRDP) におけるリンクモデル実践の成果と課題および展開」 ▽ アッケル・アリ, ライズ・ウッデイン, アニススール・ラーマン (ユニオン開発オフィサー) 他5名 「日本での農村開発振興の現場からみたリンクモデルの実践的課題」

◆ 「バンコク・タイ」研究会

6月15日 書評会：市野沢潤平著『ゴーゴーバーの経営人類学』

市野沢潤平 (東京大学) 「経営人類学とは？」 ▽ 書評コメント：吉井千周 (慶応大学)；武井泉 (東京大学)

8月28日 エミ・ドイル (アジア工科大学) 「小規模インフラストラクチャーと貧困削減——ラオスにおけるケーススタディ」

9月18日 平松秀樹 (大阪大学) 「チャート・コープchetti 『裁き』——出家と実在のはざまで」

◆ 「農耕文化研究振興会」研究会

第45回例会：6月18日 岡本雅博 (ASAFAS) 「ザンベジ川氾濫原の人と暮らし——フィールドワークを考える」

▽ 鈴木伸二 (同) 「二つの狭間：国家と地域、わたしとフィールド——ベトナムのエビ養殖の事例から」 ▽ 林 行夫 (研究所) 「フィールドの彼方——タイ系民族の宗教と社会の臨地調査経験から」

バンコク

Bangkok

藤田 幸一

ある些細な家庭的事情から、思わぬ単身赴任となった。でも、現地雇用スタッフのおかげで不自由はない。時間があり余るほどある。タイ語も少しは習得した。つれづれなるままに、いろいろと考えた。

相も変わらず、地域研究ということである。自分は、若い頃、農業経済学という学問をバックグラウンドにして、バングラデシュで研究を開始した。バングラデシュは東南アジアではないと言われたので、その後、ミャンマーやラオスの研究を始めた。そして今、タイにいる。

タイの研究者や学生に誘われて研究会に出てみた。タイ研究者なら共有している常識が自分には欠けており、それがかなり深刻なものであることにだんだん気づき始めた。議論に参加しようとしても農業経済学で切るか、他の国や地域での自分の経験・見識をもとにしか参加できないのだ。議論に参加できるだけの常識を身につけるには、10年くらい継続して研究しなければ仲間には入れてもらえないだろう。地域研究にはそれだけ長い懐妊期間がいるのだ。

人が本格的に研究を始めるのが25歳だとして、55歳くらいまで頑張るとしても、30年である。単純計算で3つの地域で地域研究ができることになるが、地域研究だけやっている馬鹿はいないだろうから、頑張ってもせいぜい2つの地域であろう。地域の問題が地域を越え、相互依存関係がものすごい勢いで拡大している昨今、これでは間に合わない。

やはり、余計なことを考えないで、研究者としての幸せのために、ひとつの地域の地域研究に邁進すべきなのか？地域間比較という方向もあるだろうか？しかし、農業経済学を武器にしているいろいろな地域の問題に取り組むのと、どこが違うのか？

先日、ラオスから陸路で中国の雲南省に調査に出かける機会を得た。中国の東南アジア進出の勢いは凄まじい。また雲南の実情を垣間見て、東南アジアをみる重要な視点をも一つ得た気がした。しかし英語がまるで通じない。中国語をやるしかないのか、と考へて、また憂鬱になった。(研究所助教授)

ジャカルタ

Jakarta

浦野 真理子

ジャカルタ連絡事務所は、ジャカルタ中心部、BlokMの近くのクバヨラン・バル地区に位置する一軒屋です。クバヨラン・バル地域は主として戦後に開発された都心部近くの高級な住宅地で、町中とは思えないほど多くの木々が植えられ、目を楽しめるとともに、朝の散歩の良い木陰をつくっています。私は私立大学の教員ですが、去る8月の終わりから2005年3月まで、こちらに約半年の駐在をさせていただいています。

事務所で継続して行われているおもな業務は、事務所の会計処理、現地語図書の購入、および、必要に応じて京都の東南アジア研究所から寄せられる調査許可手続きの助力要請に応じることなどです。そのほか、余りの時間は自分の研究に使うことができ、大変感謝しています。私の研究フィールドは、東西カリマンタン(ボルネオ島)で、自然資源管理と地方分権との関連で、現地の農民運動がどのように進展しているかをおもに見ています。

事務所には私のほか、運転手さんと2人のお手伝いさんが働いています。彼らはすでに何年にもわたってこちらで働いているため、事務所の日常業務に精通しておられます。そのため、私も含めて、しばしば短期間の滞在である駐在員が事務所業務を円滑にこなすのに非常にありがたい存在となっています。特に運転手さんは非常に有能で、運転以外の事務所の雑務を器用にこなしてくれます。先日、事務所をはじめ訪問された方が、コンピューターの入力を行っている彼の後姿を見て、また、彼が本業は運転手であることを聞き、コンピューターの入力までできる運転手は非常に珍しいと大変感心しておられたほどです。

着任して2カ月の間、今までの駐在員の方々のさまざまな知恵と工夫がこの事務所運営の確立に寄与してきたことを知りました。今後、短い期間ではありますが、皆様のご助力をいただいで無事に任期を勤めたいと願っております。どうぞよろしく願いいたします。(研究所客員部門助教授)

◇『東南アジア研究』42巻1号

Southeast Asian Studies 42(1)

The Comparative Economic Performance of Malaysia: An Analysis. Yoshihara Kunio ▼ Configuring an Ideal Self through Maintaining a Family Network: Northern Thai Factory Women in an Industrializing Society. Michinobu Ryoko ▼ The Economic Crisis and Rural Households in Thailand: Impact and Response. Sukaesinee Subhadhira, Suchint Simaraks, and Somjai Srila ▼ Introducing the Cultivation of Medicinal Plants and Wild Fruits in Forest Rehabilitation Operations on Former Shifting Cultivation Sites in Sarawak Malaysia: Issues and Challenges.

Hua Seng Lee ▼ 「南ラオスの民族混住村における水牛供犠祭り」中田友子▽書評 (Book Review) Aris Ananta, Evi Nurvidya Arifin, and Leo Suryadinata, *Indonesian Electoral Behaviour: A Statistical Perspective*. Riwanto Tirtosudarmo ▽ 現地通信 (Field Report) Notes on Indonesian-Chinese and Filipino-Chinese Literature. Caroline S. Hau

◇『東南アジア研究』42巻2号

Southeast Asian Studies 42(2)

Agropesticide Contract Sprayers in Central Thailand: Health Risks

and Awareness. Somluckrat Grandstaff and Waraporn Srisupan ▼ Forest, Ethnicity and Settlement in the Mountainous Area of Northern Laos. Yokoyama Satoshi ▼ 「タイの鉄道と米輸送 1941～1957年——輸送力不足と東北部」柿崎一郎 ▼ 「領域国家形成の表と裏——冷戦期タイにおける中国国民党軍と山地民」片岡 樹 ▼ 「戸惑いの時代と『イヌル現象』——大衆文化の観点からみたインドネシア・ムスリム社会の動態」佐々木拓雄▽書評 (Book Review) Mary

P. Callahan, *Making Enemies: War and State Building in Burma*. 中西嘉宏 ▽ 現地通信 (Field Report) Notes on a Discussion with Young Southeast Asian Intellectuals. Patricio

出版ニュース
Publication News

N. Abinales

◇研究報告書シリーズ (Research Report Series)

■ No.101. Abe Shigeyuki and Bhanupong Nidhiprabha, eds. 2004. *State, Market, Society, and Economic Cooperation in Asia: JSPS-NRCT Core University Report*.

■ No.102. Poranee Sirichote. 2004. *Thai Rare Books in Thai Database of CSEAS Library: The Early Period up to 1922 A.D. (2465 B.E.)*

Kyoto Review of Southeast Asia

Issue 6 of the *Kyoto Review of Southeast Asia* will highlight commentaries, features, and reviews on the theme “Elections, Selections, and Statesmen in Southeast Asia.” It will include a transcript of the April 2004 Bangkok forum “Statesmen or Managers: Image and Reality of Leadership in Southeast Asia,” co-sponsored by the Bangkok Liaison Office and Chulalongkorn University (Political Economy Centre, Faculty of Economics, and Faculty of Political Science). The forum featured Benedict Anderson (professor emeritus, Cornell University), author of the pathbreaking *Imagined Communities*; Pasuk Phongpaichit (Chulalongkorn University), whose latest work is *Thaksin*, co-authored with Chris Baker; Vedi Hadiz (National University of Singapore), co-author with Richard Robison of a critical study of post-Suharto Indonesian politics; Francis Loh Kok Wah (University Sains Malaysia), a scholar who is also active in *Aliran*, a prominent democratic voice in Malaysian politics; and Paul Hutchcroft (University of Wisconsin), known for *Booty Capitalism*, his study of patrimonialism in the Philippine

banking sector.

In keeping with its focus on the recent elections in Southeast Asia, Issue 6 will translate one or more essays from Bahasa Indonesia and reprint articles from *Kasarinlan* (Third World Studies Center, University of the Philippines). We extend our gratitude to TWS director Teresa Tadem for agreeing to this joint venture, which will extend circulation of *Kasarinlan*'s special issue on the Southeast Asian elections.

The editorial board has also released a print edition of the *Kyoto Review* containing selected essays from the first four issues. This edition will be distributed to libraries and research institutions throughout Southeast Asia, with an emphasis on institutions outside the capital regions. The goal is both to introduce the journal as widely as possible and to assist our counterparts by providing an additional resource for their teaching and research activities.

(Reported by Patricio N. Abinales)

VISITORS' VIEWS

AGRICULTURAL DEVELOPMENT IN THE DRY ZONE OF CENTRAL MYANMAR

By Khin Lay Swe



The Dry Zone is the cultural heartland of Myanmar, home of Pagan, a glorious land of pagodas. When the Pagan dynasty flourished in the eleventh century, thousands of pagodas were constructed, possibly with the excessive use of

fuel wood. Since that time, the ever increasing population combined with unfriendly climatic conditions has led to over-exploitation of the region's natural resources. At present, land degradation and severe soil erosion are common.

The Dry Zone covers approximately 122,000 square kilometers. It is characterized by very low and erratic rainfall and shallow soils of low fertility and low moisture-holding capacity. This resource-poor area is home to 11.5 million people, mostly subsistent farmers. Improper agricultural practices, such as cropping patterns and land preparation, have contributed to the deterioration of the Dry Zone's fragile ecosystems. For example, crop residues are traditionally used for (always scarce) fuel and animal feed, although this decreases the organic matter and fertility of the soil. The region is also a "main surplus-producing area" of pulses and oil-seed crops. To reduce the risk of entire crop loss, farmers practice multiple cropping, most prominently mixed-cropping and inter-cropping. Monsoon sesame or peanut is broadcast between pigeon pea rows, and pulses are planted as sequential crops after the harvest of oil-seed crops.

Land use has been pushed far beyond capacity in pursuit of productivity increases. At the same time, because there is no functioning policy to cover crop failure, farmers are not motivated to try higher inputs, the application of nutrients, or better management techniques. If farmers

continue such practices, agricultural development cannot be sustained. Measures are urgently needed to enhance productivity while protecting the environment.

(Visiting Research Fellow)

LIFE IN KYOTO

By Rini Yuliasuti



This is my first visit to Japan. I feel indebted to CSEAS for enabling me to live and work for six months in Kyoto, famous as a cultural and university city. In the CSEAS Library, I am working on the online cataloging of the Indonesian book collection, making it accessible to researchers, library visitors, and all who need information through the CSEAS Online Public Access Catalog. Working at the CSEAS Library is very enjoyable because of friendly colleagues who hospitably introduce me to various aspect of Japanese culture. I also have access to information about Indonesia from journals which are available in the library, such as *Tempo*, *Gatra*, and *Forum*.

My stay in Kyoto—a beautiful and clean city—is an unforgettable experience for me. I have enjoyed the Kamo River, the mountains and museums, the temples and shrines, and cultural traditions like the Gion Festival, Dai Monji, and the tea ceremony. I have also traveled to historical places outside of Kyoto, such as Kanazawa, Kobe, and Osaka, which have their own cultural traditions. I hope in the future to have a chance to visit more places in Japan, a country always concerned to protect its traditions. For all this, my sincere gratitude goes to the director, professors, associate professors, researchers, foreign fellows, library visitors, and other colleagues at CSEAS.

(Visiting Research Fellow)

TROPICAL SEASONALLY DRY FORESTS IN CONTINENTAL SOUTHEAST ASIA

By Pongsak Sahunalu



Ecological studies of tropical forests are mostly concentrated on the wet or humid tropics, the tropical rain forest. Tropical seasonally dry forests have been less well studied. Is this because they are less attractive or because of ecologists' ignorance?

The tropical seasonally dry forest is not less important than the wet or humid tropical forest, particularly in continental Southeast Asian countries. Available data suggest that in 1996, total forested area in 5 countries—Thailand, Myanmar, Laos, Vietnam, and Cambodia—was 92.7 million ha and that the population of these countries was about 200 million people. These countries contain protected forest areas amounting to as much as 10.96 million ha, or about 12 percent of the total forested area, and include all forest types. About 11 percent of forests under protection schemes are deciduous and semi-deciduous broadleaved forests, while semi-evergreen moist broadleaved forest accounts for about 20 percent. These types of forests are broadly classified and well recognized as tropical seasonally dry forests.

The protected and unprotected forests of continental Southeast Asia are among the region's most precious natural resources. No one denies that the advancements in economic growth and living standards enjoyed today owe much to their exploitation. Seasonally dry forests—such as mixed deciduous, deciduous dipterocarp, and seasonal evergreen or semi-evergreen forests—have already been heavily exploited for timber, but remain vitally important for their contribution of functional activities and services to the global environment and to all human beings. If the problem of climate change is the outcome of tropical forest disturbance or deforestation, special attention and conservation of the tropical forest must include the seasonal dry forest. This pristine forest type deserves special attention and accelerated ecological studies.

(Visiting Research Fellow)

A SMART RESEARCH PARTNERSHIP FOR SUSTAINABLE UPLAND AGRICULTURE IN VIETNAM

By Nguyen Van Viet



The Vietnamese people praise Japan as a highly developed country with a very distinguished culture. In this, my first encounter with Japan's culture and way of life, I have tried to discover and learn as much as possible. It has been a

great opportunity for me to be a research fellow at CSEAS—a dream come true. My strong impression of Kyoto, the former capital, is of modern style co-existing and harmonizing with nature. The different festivals, which are enthusiastically attended by the masses, are an excellent example of how Japan is able to conserve its culture. In addition, I have always been impressed by the uniform forests and high-yielding paddy. It was a great surprise for me to compare rural villages with urban areas in Japan; it makes me wonder what Vietnam's future will look like.

Agriculture is still an important sector of the Vietnamese economy. The northern mountainous region plays an important role in this economy and also in preserving the ecological environment of the country. The region is known for its rich and diversified culture and holds the nation's largest deposits of valuable mineral and energy resources. However, Vietnam's high rate of population growth, deforestation, environmental degradation, poverty, and low level of economic development are still major challenges. There is an urgent need for more research grants to be allocated for agricultural and forestry development in this region.

One positive sign is the collaborative research conducted by CSEAS and the Vietnam Agricultural Science Institute (VASI). Research undertaken by CSEAS in other Southeast Asian countries has accumulated rich information on agriculture and forestry. I believe that future teamwork between VASI and CSEAS—unique in including both natural and social scientists—would bring many benefits. Japanese experience with cultural conservation and economic development contains useful lessons for the

development of Vietnam's northern mountainous region. I look forward to a bright future for this smart partnership.

(Visiting Research Fellow)

ISAN INFORMATION IN THE CSEAS LIBRARY, KYOTO

By Pornpimol Manochai



During my work at CSEAS, I found that many researchers, faculty members, and students were interested in studying about Thailand, especially Northeast Thailand or "Isan." When a Japanese student asked me one

day for information about the history of northeastern Thailand, I was very happy to compile a selected bibliography of Thai books on Isan in the CSEAS library. "Isan Information in the CSEAS Library" is now available for all interested users. It is printed and bound in a handy volume which comprises the bibliography, abstract, and call number of books on Isan. There are also Title index (romanized) and Author index users' tools to access the information rapidly. I was very glad to have an opportunity to work here and share local information about Thailand. If more information about the Northeast is needed, please feel free to visit the Sirindhorn Isan Information Center.

The Sirindhorn Isan Information Center is a special collection situated in the Academic Resource Center, Mahasarakham University. The Center collects and conserves information relating to Isan culture, traditions, education, arts, history, literature, and all other aspects of northeastern Thailand. It uses artifacts of Isan culture and tradition as a basis for the collection's arrangement and provides services and access to users domestically and internationally. The Center's collection includes books, research studies, journal articles, clippings, pamphlets, local newspapers, maps, slides, videos, microforms, CD-ROMS, models, digital images and text on Isan, and other media such as calendars, stamps, and greeting cards.

The Sirindhorn Isan Information Center website is <http://202.28.32.124/sirindhorn2/th/en.php> or <http://www.library.msu.ac.th>. Please contact your

librarian for networking and information sharing between Sirindhorn Isan Information Center, Mahasarakham University, and Kyoto University's CSEAS library.

(Visiting Research Fellow)

お知らせ



科学研究費補助金（基盤研究（A））『インドネシア地方分権下の自然資源管理と社会経済変容——スラウェシ

シ地域研究に向けて』（平成16年度から3カ年 研究代表者：田中耕司）の進行中の活動内容と研究成果を同時進行で紹介するウェブサイトを開設しました。<http://sulawesi.cseas.kyoto-u.ac.jp/>

<来訪者>

2004年5月24日 Dusadee Yoelao（シリナカリンウィロート大学行動科学研究所助教授）、Pachongchit Intasuwan（同助教授）他4名 ▼ 5月26日 Felix P. Klebo（農業省ラグーン地域農業事務所所長）他5名 ▼ 7月30日 Terance Bigalke（イーストウエストセンター教育部長）他1名 ▼ 9月11日 Kinley Dorji（アジアリーダーシップフェロー・プログラムフェロー、Kuensel 新聞社専務理事・編集長）他6名 ▼ 9月27日 Pannee Panyawattanaporn（タイ NRCT 国際関係局）他2名 ▼ 10月13日 Watcharin Gasaluck（コンケン大学工学部土木学科長・準教授）、Pongsakorn Punrattanasin（同講師）他3名

2004年11月12日発行

発行 〒606-8501

京都市左京区吉田下阿達町46

京都大学東南アジア研究所

Tel 075-753-7344

Fax 075-753-7356

<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>

編集 石川 登・米沢真理子